

# 統一

第七十八號

明治三十年二月十四日 第三編 第三號 第一頁  
明治三十年二月二十日  
明治四十二年十二月十五日(每月一週十五日)發行

(每月一回)

であるが、松陰先生の熱心なる訓育が基となつたのである、この先生の塾がなければ斯かる人々は出なかつたかも知れませぬ

松陰先生の主義の中心は大義名分論であります、則ち國家には國民一般の則るべき國體あり、家には家族の總てが遵守すべき道があるこれを決して忘却してはならないと云ふ事を非常厳格に云はれたのでありますこの先生の熱烈なる訓育に基いて伊藤山縣等の維新の元勳が出来を譯てあります

西洋の例を申せば有名な教育者にベスタロッチと云ふ人があつたが此人は實物教授と云ふ事を始めた人である、實物教授とは御承知の通り生徒に何か物を教ゆるに花ならば花、鳥ならば鳥、柿ならば柿と云ふ様に一々實物を示して教ゆるのである、この人の家は極粗末な百姓屋であつたが其中に教ゆる事が如何にも巧妙であるので遂に文明諸國の立派な教育家が皆氏にならふて實物教授をなすに至つた次第である、我國でも之にならふた小學校の本を見ると皆書が示してあつて其の

三高等學校と第六高等學校としては盛んに研究して居る、其他全國各所に七ヶ所程ある、一ヶ年經過しない内に八九人の孫を出す云ふ事は實に名譽であります、天晴會と云ふ名稱を撰定したのもこの席上であつたので、云ふ事は實に愉快である、何事でも出来上つた物に附随して行く事はあまり功名でもないが、物の始をなす事は真に愉快である、兎に角現代及後世の思想界に光を與ふる使命を有する天晴會を生み出した此の會は非常な名譽である、隨つてこの會は永久存続させたい希望であります

今日は會式の事でありませうから上人の事に就て御話致します、元來宗教問題で極めて大切な點は人を教ふと云ふ事と世を教ふと云ふ二方面である、人を教ふ方面では人の現在と未來とを併せて教ふ事を忘れてはならない、又世を教ふとは、國家と社會人類とを教ふのである、此の各方面が圓滿に調和されて行かんければならない、ところが現在の救済力を入れて居る者は未來永久の教を忘れ、又自己の事を考へて居るものは多

側らに假名が書いてあるので此等は皆このベスタロッチより始まつたのであります、鳥様に何事でも其の本を導ねて見ると小さな粗末なものが多くが其の主義主張が立派であれば必ず美しい花が咲き果が結ぶものである、妙典研究會も丁度それと同じで徹々たる會合であつたが此中から偉大なる會を生み出して居るので此の點は實に此會の名譽であると思ふ

妙典研究會の長所は温かき信仰と立派な主義とを圓滿に調和して行く點にあります、我國現代の思想界の弊害は立派な理性を有する人には温かき信仰がなし、熱烈なる信仰を有する者は固陋にして立派な主義と相容れざる點にあるのである、妙典研究會はこの双方の調和を計るために興つた會合であります、則ち社會の上流に位して居る冷かなる主義の人に意義ある温かき信仰を扶植することに勸めたのである、この結構なる點が本となつて立派な天晴會を生み出したのである、故に天晴會も無論この主意を奉じて成立して居るのであります、地方にも大分天晴會の支部が出来ました、第

くは極端な個人主義に流れて他人の事を思はない、又國家を思ふものは個人を忘れ社會を忘るゝのである、有名な平の重盛でさへも忠ならんと欲すれば孝ならずと云つて非常に煩悶して遂に死するに致つた、これは精神がよくこなれて居ないからである、よほど物のよく判つた人でも大抵重盛の如き状態に陥るのである、斯かる矛盾は非常に人の精神を苦しめるものである、宗教もこれと同じで、個人救済に傾く宗教は國家の教を忘れるのである、個人救済の内でも未來を思ふ者は現在の教を忘れて現在は假のものであつて人生は一睡の夢に過ぎないと云つて未來の一面のみに力を注ぎ、又現在を思ふものは多くは迷信の状態に在つて只家運長久息災延命と云ふ様な冥福的の考のみで、永遠の人格向上を考へない、現在の家運長久等を祈るも必要であるが眞の宗教は現在も未來も共に教ふものである、決して一方にかたよるべきものでない、日蓮上人の御趣意はこれが圓滿に纏まつて居るのであります、上人の事は法華經の神力品に上人が本化上行菩薩であ

りた時佛陀より預言された配題すべき言葉があるの  
 其の根本に於て普通の各宗の祖師などは余程違つて  
 居る、上人は佛陀の大使命を奉じて末法に出現せられ  
 たので法華經中の佛説を一々身を以て實行せられて居  
 る、決して夢想の様なものではない、親鸞上人などの  
 機に觀音機が出て来て、私があなたの嫁になつて他力  
 本願の弘通を御助け申すと云ふ機を怪しいものではない  
 い、上人の行動が法華經の預言と符合して寸分違はな  
 いのは決して一人の考て出来る事ではない、本化上行  
 の再身であることはどうしても疑ふ事は出来ない、出  
 現の時と云ふ出現の處と云ふ又其の當時の人々が悉く  
 反對して種々の迫害を加ふる其の有機が法華經の金言  
 通りである、殊に不思議なるは其の當時世間より活佛  
 の如く尊崇されて居た人々が劇しく反對した事である  
 今でも内務省では救濟事業の模範者として勲章をまら  
 ひ僧侶はないと云つて貴んで居る極樂寺の良觀の如き  
 がある、此人は施樂院等を設けて一人て七萬有余の病  
 者を救ふたと云ふ位で當時の人々は忍性菩薩と云つて

非常に尊崇したものである、見様に依つては日本の高  
 僧中一番をらひとも思はるゝのであるが、此人などが  
 上人に對して劇しく反對して居る、斯様な配合は到底  
 一人て出来ない事、實に不思議であると云はなければ  
 ならん  
 上人が出現して世間を救ひ玉ふ事が神力品には「日月  
 の光明の能く諸の幽冥を除くが如く斯の人世間に行じ  
 てよく衆生の闇を滅し無量の菩薩をして畢竟して一乘  
 に归せしめん」と仰せられてある、この金言に依れば  
 紛亂たる佛教は上人の出現に依て一つの大きな教へに  
 統一されこの大なる教へが世間の光となつて一切衆生  
 の闇を滅除するのであると云ふ預言であります、この  
 文の中で最も着眼すべきは「斯人世間に行じて能く衆  
 生の闇を滅す」と云ふ點である、抑も人生の闇とは如  
 何なるものであるか、人の心の闇は現在ばかりでない、  
 又未來ばかりでない、人は病氣に罹れば苦痛であるが  
 健康でも精神には何か煩悶があるが、又金がなければ  
 非常に苦しみが金があつても苦痛は絶ない、物質の闇

題は低いところでは現實にひどく來るのであるが、本  
 當は人類の苦痛の根元は精神の方が多、これは實  
 際経験して見るとよく判る、私は本年の春千葉縣に向  
 風會と稱するものを開きまして今では縣下の有力な會  
 になつて居るのですが、此の會の目的は物質と精神の  
 兩面を救や趣意で設立したので時々各處に講演會を開  
 いて居るのであるが、其の講師を出して行く配合に就  
 て物質の方面を話す人と精神講話をする人とを調和し  
 て居るのであるが、物質の話は誰が誰でもよく判り又  
 直接利益に關係した話であり、精神上の話は仲々六ヶ  
 敷の誰にも判ると云ふ譯には行かない、又利益にも  
 直接關係して居ない、然るに鬼の話や鶏の話などを多  
 くして精神上の心靈に關した話を少くすると人の出が  
 非常に悪くなつてどうも行きかない、この例に  
 依つて考へても人は物質よりも精神に重きを置くと云  
 ふ事がよく判る、どうしても人は精神が本である、こ  
 の根本たる精神を指導し開發するのが宗教の本領であ  
 ります、この精神問題をさめるには現在を救ふにも永

久の問題より決定して來なければならぬ、孔子の教へ  
 ても家を治め國を治めんとするには心が本をなす故心  
 から極めて掛らんければ出來ない、心の奥には明德と  
 云ふものがある、故にこの明德たる玉を磨かんければ  
 ならん、この玉を磨くには至誠でなければならん、誠  
 は天の道であると云つて居る、故に儒教の根元は性と  
 天道とである、然しこれは六ヶ敷からあまり云はない  
 のである、門弟子が「性と天道とは得て聞べからず」と  
 云はれたのはこれでありませぬ、佛教も之と同じで心  
 の闇を除くには心の根本を明かにせんければならん、  
 心の本を明らかにするには現在だけの者ではだめだ、  
 又未來のみの考ても無論いけな、故に上人は人を教  
 ふには現在と未來との兩面を圓滿に教ふて居らるゝ、  
 立正安國論に「先づ生前を安んじて更に没後を扶けん」と  
 仰せられしは實に千古の光りてあります  
 前にも一寸御話した通り上人の御趣意は個人を救ふと  
 共に國家全體を救ふことに重きを置居らるゝ、これ  
 が又最も注意を要する點である、世間の多くの宗教は

大體この點を逸して居る。佛教各宗でも一往は天下泰平とか國家安泰とか云ふが、日蓮上人の國家を救ふと云ふ事は決して斯様な皮想なものではない、上人の國民全體が卒由すべき大なる主義を國家の上に立るとしてありまら

上人の國家主義は内に向つては大義名分を明らかにし、價兆心を一にして忠節を盡すと云ふ點である、この事も現今では教育勸語等で誰も皆知つて居て詳しく感じないが、今より六百年前即ち上人の時代は非常なものであつた、鎌倉幕府の全盛時代で恐れ多くも四人の主上が或は海に沈まれ、或は遠島に流されて御居てになる、かゝる時代に上人が單身大義名分論を唱道されたと云ふ事は實に容易なものでなかつたと思はなければならん、又外に向つては先づ日本に立派な大徳教を立て、而して世界萬邦に光被させ様と云ふ考である、今日は三宅博士が帝國大學で「國家存立の理」と云ふ題で話さるゝさうだが如何なる事を云はるゝか知らんが、苟くも國家が存立して居る以上は内に向つて

き聖風を呈して居る、汝等如ら陪臣がかりにも國政を執ると云ふ不都合な事があるかと云つて極力攻撃して御居てになる、この上下轉倒の状態が丁度當時の宗教の状態と同じ有様を呈して居るのである、佛教各宗が本佛釋尊を打忘れて彌陀とか大日とか云ふ陪臣同様な佛に信仰を移して居る、故に上人は宗教の上ではどうしても本佛釋尊を信仰の對象とせなければならん、これと共に國家の上では大義名分を明らかにして至上を世に出し奉らんければならん、これが上人の大誓願でありまら、一泰山に昇らずんば天の高さを知らず、深谷に入らずんば地の厚さを知らず」と云つて立正安國論を見よと仰せられて歸られたりである、この有様は殆んど北條に對する宜體狀でありまら、こゝ云はれては北條もだまつて居る事が出来ない、故に種々評議を凝して、日蓮は言を佛教に寄せて國家を簡るものであるとの口實を設けて遂に龍の口へつれて行つたのである、一法を知り國を思ふの志、尤も賞せらるべきの處」と仰せられて居る通り上人は堂々と正義を主張された

照すのみならず必ず外に向つて發すべき光りを以て居らんければならん、日蓮上人は北條に向つて貴様に天下の政權を預つて居ても、九て何にも知らないものであると云はれて居る、この上人の意氣を先刻拜讀した「一昨日御書」に依つて御話しやう、この御書は文永八年九月十二日の朝御書になつて御自身に御持参になつたのである、一昨日御書と云ふのは「一昨日見参に罷入候」とあるから後につけたのである、一昨日即ち九月十日に行敏等の論奏に依つて裁判所へ出頭された日である、當時は問注所と云つたのであるが、この問注所へ出て一々明瞭に辨明されたのである、それより一日を隔て、十二日の朝更に此の書を持参して盛んに折伏されたので上人の意氣は真に天を衝て居る、書中に如何なる事が書てあるかと云ふに「方今世悉く關東に歸し人皆士風を貴ぶ、日蓮生を此土に得たり豈我國を思はざらんや」と仰せられてある、方今國民の狀態を見るに苟くも日本の國民でありながら皇室の尊嚴を忘れて鎌倉の陪臣に歸伏し、其の風習等は實に賤しむべ

のてありまら、この點に充分注意せなければならん、上人の考へては此の大法たる法華經が此の國の大徳教となつて世界萬邦に光りを及ぼさんとするのである、故に國に就ても普通の愛國者が云ふ様な單に國自慢でない、立派な大徳教を以て世界を光被する大任を有するのが我國であると自覺して居らるゝのである、故に「一國浮提第一の本會此國に建つべし」と仰せられてある、斯る大理想大抱負を有して居らるゝ宗教家は決して他にない、各宗で云ふ王法爲本と云ふ様なことは實に天地の相違である、又教育勸語に示められてある「國憲を重んじ國法に隨ひ」と云ふ様な法律的的のみ考へて其の奥に大徳教を認めない考へとは九て比較にならない、世間の者は只政治と云ふが何が政治の本體であるかと云へば淺薄なる基礎より知らない、上人の大理想は内に向つては大義名分を明らかにして價兆心を一にし、外に對しては大徳教を建設して世界に光被するのである、世間では大關秀吉が偉らひと云ふが此頃小笠原貞隆の研究された結果に依れば秀吉は

日蓮宗の信者であつたさうだ、さすれば上人の大抱負の幾分かを武力的に實現したのである、日蓮上人の内に向つての大義名分論は遂に建武の中興となつて突發して北條氏を滅ぼしたのである、上人が最後の遺訓として池上の開堂供養に殊に立正安國論を講じ玉ひし深意を思はんければならん、又御臨終の時に經一丸を枕邊に招き京都の弘通を遺囑された事は特筆大書すべき點である、その經一丸が後に日蓮上人となつて京都に上り後醍醐帝に拜謁して上人の大主義を奏上し奉つたのである、この献策が本となつて北條氏遂に斃れたのであります、其の後、足利が叛いて後醍醐帝は吉野の行在所で崩御されたが、其の時左の手に法華經を持ち、右の手に劔を按じ「元兇未だ斃れず」と仰せられて京都の方を向て崩御されたのである、其時の御遺言に「我が遺言は背くものは子としては體にあらざ、臣として盡忠にあらず」と仰せられた、盡忠の盡の意味は、草を抜き取つても、あとから種々出てきて盡くせない」と云ふ意味の字である、この御遺言は我等臣

民の決して忽緒に附す事の出来ない遺訓であり、御遺言は服御を改めず其儘京都の方を向けて葬つてあるのである、この建武中興の遺志を受継いで起つたのが明治の維新であり、明治の維新は一方の目的は達して居るのであるが深く考へて見ると肝要な事即ち教への中心たる大徳教が未だ建つて居らない、故に内に向つても未だ皇室を思ふ觀念が薄く、外に向つては九て何の考も持つて居ない、これはどうしても上人の遺志を受継いで居る我々が是非建設せんければならない大任を有して居るのである、私は此の重大なる任務を受けて現れて來たのが確かに天晴會であると思ふ、天晴會と云ふ名稱も無論それである、「天晴ぬれば地明らかて法華を識るものは世法を得べきか」である、この法華の大教義が即ち全世界を照す大徳教であり、日蓮上人の遺訓は決して自己のみを思ふて國家を忘るゝ様な事があつてはならない、上人は個人を救ふと共に「我れ日本の柱とならん」等と誓つて御居てになる、上人は一方か

ら見れば吾人の大導師であるが一方から見れば日本の大忠者であります、偉大なる國家と云ふものは武力のみを以て決して世界に臨むべきものではない、阿育大王が云はれた様に「敵する時は之を斃し伏する時は大徳教を以て行かんければならぬ」また日本人の精神の延びない内はそう云ふ事は判らんものが多いが理想が開けて行くと同時に大なる徳教の必要を感じて來るのである、今の國家の發展を計るには經濟と武力とはあるがもう一つ徳教が必要である、この三つの中では寧ろ徳教が中心をなすべきものである、上人はこの徳教を建ることに最も力を注がれたのである、この上人の主張は武力とも經濟とも決して衝突すべきものではない、實に圓滿に調和されて居るのであります、一個人の信仰に就ても只人情のみの満足を得し理性をくらす様な信仰はだめだ、總てに就て双方の圓滿なる發達を計ると云ふ事が上人の特長であります、上人の主義を奉ずるものはこゝに着目して突進せんければならぬ、私の師匠の日常上人の話に會て圓山縣の津山と云

ふ所で百姓が一揆を起し數百人が櫛の附近に集まつた事がある、其時三四人の武士が之に向つたら忽ちに皆逃げ出してしまつた、之れは彼等は皆烏合の衆であるからである、此中に一人でもしつかりしたやつがあればたのもしひが、仲々ないものであると云はれた事があつたが、今の日蓮門下も殆んどこの烏合の衆の仲間になつて居てちやんとした中心がないから、いざと云ふ時分には何にもならない、志ある者は及ばずながら大自覺を以て上人の遺志を繼げんければならぬ前にも繰返して云つた様に上人の主張は個人と國家とを圓滿に教ふ點にある事を忘れてはならん、皆さんは國家を思ふ志が如何に厚くとも個人救済の事を思はん様ではやはり一方に偏して居るので上人の思召になつて居ない、此の夏龍の口の講習會へ一人の軍人が聽講に來ました、此人は日露戦争の當時二三の戦友と共にたとへ二人死んでも一人生きて居れば、死んだ二人前を一人で飾らかうと云ふことを互に誓つたところが、誓つた戦友が皆死んで自分か一人生き残つたので

あるが、さて仲々自分の誓つた様に働けぬ、それ故死んだ親友に申譯がないと云ふので七度程死なうと思つて死を計つたが幸か不幸か死なれなくて今にこうして生き残つて居る、實に人間の力らなんと云ふものは僅かなものだと言はれたが、つまりそんな譯で安心立命と云ふ様な事は單に國家と云ふものだけでは出来ない、やはり實在の考が極めて必要であります、故にそれらの考へが皆調よて行かんければならない、上人の大主義は個人の上にも家庭の上にも國家の上にも宇宙の上にも人事百般の上にも宗教の大なる光明を認めて行くので眞に尊い教であります、吾等末弟はかゝる偉大なる上人の抱負の下に調和的に大發展を計らんければなりません

### 宗教の價値

笹川 眞應

命と申物は、一身第一の珍寶也、一日なりともこれをのめるならば、千萬兩の金にも過ぎたり、法華經

の一代の聖教に超過していみじきと申すは、壽量品のゆへぞかし、閻浮第一の太子なれども短命なれば神よりもかろし、日輪の如くなる智者なれども天死なれば生犬に劣る、早く御心さしの財をかさねて、いそぎ御對治あるべし(外十四、可延定業抄)

#### 一、宗教の意義

吾人は活動せざるべからず、吾人にして活動する能はずんば既に生命なきものである、而も吾人の活動は永久的ならざるべからず、本佛釋尊の智慧、慈悲、力用は永久的也、これ即ち釋尊の生命は久遠なり、永劫なりといふ所以である、然れば即ち釋尊の實在活動は、理想と現實とを遺憾なく調和して、法華經に發揮されて居る、法華經壽量品に「惠光照無量、壽命無數劫」と説き示したるは、實に吾人をして、永久的生命らしむるの教訓である、楠公の戰死は、殉國の忠節を完ふしたるものとせば、其精神は永久的に活きて居る、即ち永久的に活動せるものである、これ永久に生命あるものといふ所以である、伊藤公の異域に命を殞した

るも平和の使命を現實せんが爲である、然れば伊藤公は、永久に生命あつて靈光を放つものといはねばならぬ、宗教の價値と意義とは此に存するのである、所謂日蓮聖人が「命と申物は一身第一の珍寶也、一日なりともこれをのめるならば千萬兩の金にも過ぎたり、法華經の一代の聖教に超過していみじきと申す壽量品のゆへぞかし」と述べられたるは、斯の意義を發現せられたのである

#### 二、体现は宗教味識の眞意

淳厚俗をなすは、日本民族の美風である、然るに此美風が破壊せらるゝが如き傾向あるは、その原因何れにあるか、之れ畢竟するに、宗教味識の觀念なりに職由するのである、古昔、夏の禹王出て、路に罪人を見て車を下り泣いて曰く「堯舜の民は堯舜の心を以て心とす、寡人に至りて各々其心を心とす、寡人これを耻づ」と謂ひしは、體現の意義はこゝに包まれて居る、勸語にその旨を體せよ、と宣へるは實行を促進させん爲の靈意で、宗教は感化を本領とするものなれば、信仰は教

義を體現するを根本とするのである、然るに民族性の本領を失却して惡風潮に感染する傾向あるは、精神感化の中心點を誤る所以である、中心とは何ぞや、宗教の權威なきを云ふので、宗教の權威は眞理の靈光を意味するのである、日蓮聖人が、法華經を身に讀み奮闘せられたるは宗教味識の眞意を示されたるものである

#### 三、教法の尊重

信は行の本也とは、我等が奮闘活動をなし、その本領を發揮すべく教へたる知言である、現代の人士の、浮薄輕兆に流るゝは教法尊重の至誠が欠陥して居る故である、古語に「楚國以て寶となすなし、惟善以て寶となす」と謂へるは、眞に味ふべき語で、吾々國家の誇りとするものは善良なる教法の存在するを國寶と爲ねばならぬ、その國民の品位の優劣を別ち、自ら文明人を以て任ずる以上は、教法を尊重して國民の品位を高めねばならぬ、これはを思はずして、教法を度外視するが如きことあらば到底美なる國民性を發揮すること

は出来ぬ、尙再言すれば信は行の本也、さればこれに依つて公德私徳を完全に修めねばならぬ、實に教法の尊重は經國の大本である、而もこの教法は、顯本的統一の眞理を遺憾なく發揮せる法華經でなければならぬ、法華經は本佛釋尊、誠を誇かにするの教訓にして眞、善、美、を完全に體現したるものである、かの儒道に「天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教」とある、性は即ち理解力を有する吾人の理性をいひ、道は人の人たる所以を云ひ、此道を實行するを教と云ふのである、然れども此説は相對善を發揮すれども絕對善を體現せず、尙吾人をして顯本せしむるとが出来ぬ、されど教法を尊重すべきことを教へたるは誠に感伏すべきことである、日蓮聖人は教法の尊重に對し、吾人に教訓を與へて曰く「法重しと申すは法華經也」と又曰く「所詮佛法を信ぜんには人の言を不可不用、只仰いて佛の金言をまほるべき也」と、希くば吾人をして、教法を尊重し、これを體現し、本佛のそれの如く、永久的に生命あらしめよ

## 色讀法華の壯觀

日蓮は無戒の比丘なり、法華は正直の金言なり、毒蛇の珠を吐き伊闍の梅檀を出すが如し、但し日蓮が諸人にかはる所は、法華を説の如く持ちたるばかりなり、鳥と虫とは泣けども涙なし、日蓮は泣かねども涙ひまなし、この涙世間の事にはあらず、只偏に法華經の爲なり、されば甘露の涙とも申しつべし

上人の佛法を研鑽し給ふやその正解を祈ること數句、至誠烈烈の結果遂に血を吐き給ふと云ふ、後十有二年精練深究を重ねて法華の玄旨を神會し給へり、上人初に一の願を發して曰く、日本國に渡る處の經並に菩薩の論、人師の釋習ひ見候はばやと思つて俱舍宗成實宗律宗、法相宗、三論宗、華嚴宗、天臺法華宗、これ等の宗、宗と申す宗もあまた有りと思つて、禪宗淨土宗も候なり、此等の宗々枝葉をこまかに習はずとも所詮肝要を知る身とならばやと思ひし故に隨分走り廻十二十六より三十二に至るまで二十五年が間、鎌倉と京と

叡山と園城寺と高野と天王寺と國々寺々荒々習ひめぐり候程に、一の不思議あり、我等がはかなき心に推するに佛法は只一味なるべし、何れも心を入れて習ひ願はゞ生死を離るべしとこそ思つて候に、佛法の中に入りて惡しく習ひ候はゞ謗法と申す坑にあち入りて、十惡五逆と申して父母等を殺す惡人よりもつよく地獄に墮ちて、阿鼻大城を栖かとして永く地獄を出てぬ事の候なるぞと上人の神會する所は舊來の理談的佛教にあらず、又厭世觀の佛教にもあらずして、上人は佛陀觀には無始本佛の常恒不斷の妙化を信じ、宇宙觀には温き圓慈觀に於て道徳的大規律の上に吾人は起伏するものなりとして、上はこの大慈悲に感憤すると同時に、下は慈悲の行化を起して群迷の二世を安穩ならしめんと欲しかくて上人の鮮明なる知見は彼の炎々たる熱誠と相和して茲に折伏の大化を煥發せるなり、上人この大化を起すの前靜かに思惟し給ふやう、日本國に此を知るもの但日蓮一人なり、此を一言も申出すならば父母兄弟師匠國主の玉難必ず來るべし、言はずば慈悲

なきに似たりと思惟するに、法華經涅槃經にこの二邊を合せ見るに、言はずば今生は事なくとも後生は必ず無間地獄に墮つべし、言ふならば三障四魔必ず競ひ起るべしと知りぬ、二邊の中には言ふべし、王難等出來の時退轉すべし一度に思ひ止むべしと、上人の靜思は遂に決しぬ、死身弘法これ法華涅槃の金言、人打はり惡むとも法重ければ弘まるべし、上人は積極的統一の使命を以て自ら任じ給ひ、侃々の論、諄々の辯、倦むなく怠るなく、毒鼓の音は四方に響けり、時恰も天變地天頻りに臻り、國民堵に安ぜず、上人即ち立正安國の論策を著して佛法の要は先づ生前を安んじて更に没後を扶くるにあるを説いて以て國家を諫曉す、果然三類の敵人は起りぬ、讒謗迫害至らざるなし、弘長元年には伊東へ請せられ給ふ、上人喜んで曰く、法華經の故にかゝる身となつて候へば、行住座臥に法華經をよむにてこそ候へ、人間に生を受けてこれ程の悦何事か候へきと、止まり給ひしは三年餘り、やがて赦されて鎌倉に還り給ふ、折伏の行化一日も廢てず、文永元

年冬の初には安房の布敷に赴かせ給ひしが、同十一月十一日東條の松原に俗衆上慢の輩數百人集ひ、上人を殺し奉らんとして射る箭は雨の如く、打つ太刀は電光の如し、弟子一人は當座に打殺され、二人は大事の手を負ひぬ、上人計りは射られ切れ給ひしかども、打漏されて頭に傷き左手を打たれ給ひばき、文永五年蒙古より虜狀來る、上人國を思ふて愈々心を痛め給ふに借聖の輩は讒り奉りて此千古の偉人を毒刃の下に葬り去りなんとす、如來の讒言空しからず、上人の信仰愈々堅し、日蓮生を此土に得たり、豈吾國を思はざらんや、法を知り國を思ふの志最も賞せらるべき處に邪教の輩讒奏の間久しく大忠を懷きて未だ志望を達せず、世を安んじ國を安んずるを忠とし孝とす、是れ偏へに身の爲に之を申さず、君の爲め、佛の爲め、神のため、に言上せしむる所なりと、嗚呼三類の敵人は如何なる辭柄を構へてこの純潔非凡の沙門を讒し奉りしか日蓮の徒佛像を火に入れ水に流す事、法華の守護と號して刀杖を室内に貯ふる事、凶徒を室中に集むる事、念佛

持戒者の法を毀謗する事、建長寺、極樂寺、多寶寺、大佛殿、長樂寺、淨光明寺以下の諸伽藍を燒き拂へと云ふ事、良觀雨の祈をなすとも愈々早魃なるは佛意に叶はずと云ふ事、念佛僧等の頭を斬つて由井ヶ濱に懸けよ、然らば甘雨一天に潤ひ、徳風四海に靜かならんと云ふ事、これ等の伽藍は悉くも關東鎮護の靈場、仰崇徳に異り、雲軒亮を顯し、月輪面を並ぶ、彼等の僧侶は又當世英傑の龍象、歸依誠あり、戒香身に薫じ、道風人を化す、而るに寺を燼灰の地となし、僧を斬刑の罪に宛てんとするの條、下愚愁憤を懷く、上に聞こさば争てか痛ましく思召さざらんや、摩訶達婆の眞言を五條に亂るも、也た未だ必ずしも寺宇を燒かず、逆臣守屋の佛法を一時に滅ばせしも、也た未だ必ずしも僧の頭を斬らず、日蓮が如き逆意に至つては、上古更に比なく未代争てか等輩あらん、管に一身の惡見のみにあらず、普く萬人の誤謬を致す、茲に因て行敏悲哀に堪へずと、是れ行敏と云へる道門増上慢者の讒言狀に記す所上人は逐一之を會答し給ひしも、北條の

内管領平の左衛門頼綱は宗我見の爲めに甚くも上人を惡み奉り終に文永八年九月十二日無道にも北條式目を破りて、上人を松葉ヶ谷の庵室に襲ひ、狼籍至らざるなく、平の左衛門が一の郎従少輔房と申す者走りよりて上人が懐中し給へる法華經の第五の卷を取り出して面を三度までさいなみ、さんさに打ちちらし奉り、又九卷の法華經をつはものども打ちちらして或は足にふみ、或は身にまとい、或は板敷畳等に家の二三間ちらさぬ所もなかりき、この夜片瀬の龍の口に上人の頭を切り奉らんとす、熊王童子は上人の命を領みて命吾殿の屋形に走れり、今夜頭さられにまかるなり、この數年の間願ひつる事はこれなり、この娑婆世界にして姪となりし時は慮につかされ、鼠となりし時は猫にくらわれき、或は妻子の敵に身を失ひし事大地微塵よりも多し法華經の御爲には一度も失ふ事なし、されば日蓮貧道の身と生れて父母の孝養心に足らず、國恩を報ずべき力もなし、今度頭を法華經に奉りてその功德を父母に廻向し、その餘をば弟子檀那にはぶべしと、

左衛門尉(金吾の事)は驚いて兄弟四人馬の口に取りつき、急ぎこしこを龍の口に行けり、その夜の様を上人自から書き給へるに、此れまでぞあらんずらんと思ふ處に、案にたがはず兵士の者ども打交はりてさばぎしかば、左衛門尉申す様、只今也となげく、日蓮申す様不覺の殿原かな、これ程の喜を笑へよかしいかに約束をたかうるぞと申せし時、江の島の方より月の如きひかりたる物まりの様にて辰己の方より戌亥の方へひかりわたる、十二日の夜のあけかたなれば人の面も見へざりしが、物の光月の様にて人々の面も皆な見へぬ、兵士の者共興さめて畏まり、或は馬よりをりてかしてまじり、或は馬の上にてうづくまる者もあり、日蓮申す様、いかに殿原かゝる大過ある召人に遠くのくど近くうちよれやうちよやと高々とよばはりしかども、いそぎよる人もなしと、斯くて彼等は上人の頭を切り損ねたり、而も頼綱執着の深かりしか、將た本化の高徳を顯さんとの佛天の御計ひにてありしか、上人は依智の郷に翌月の十日迄滞留せられ給ひし後この地より佐



渡の鳥へ流され給ふて、行程二周日、北海風寒さ十月廿八日に鳥に着き給ひぬ、塚原三昧堂の上人の生活は如何なりしぞ、死人を捨てる處に一間四面なる堂の佛も無し、上はふかず四壁はあらはに雪降り積りて消ゆることなし、晝は日の光のさし給はず、心細かるべきすみかなり、北國の習なれば北山の嶺の山おろしの風の身にしむことをば只思ひやらせ給へ、人も見えず食もあたえずして四ヶ年なり、彼の蘇武が胡國にとゞめられて十九年が開鏡をしき雪を食としてありしが如しと、この間上人を暗殺せんとせること、幾回なりしやと知らず、空御教書を以て或は國を追ひ或は籠に入れんと迫りしこと三度、又念佛者等或は淨土の三部經或は止觀或は真言等を小法師の類に懸けさせて集り、上人を壓伏せんと企てしが、上人一々承服せさせて、ちやうとはつめ、ちやうとはつめ給ひ一言二言に過ぎず、鎌倉の眞言師、禪宗、念佛者、天台宗よりもはかなき者なれば、その様は思ひ知らるゝのみ、利劍もてちやうを切り、大風草をなびかすが如かりきとぞ、朔風

なし、同二十六日鎌倉に還り、茲に再び折伏の梵音は振はれつ、執權北條を誡告し給ひしも、而も層々の輩又爲すに足らず、調底の長松は良匠を得ず夜光の明珠は函を出てすして、身延の靜地は上人の熱烈なる信仰と、絶大なる妙思とを迎へつ、かくて茲に末法萬年の爲に、獅子兒の薫育と、別頭教觀の結束との聖業は成辨せられたり

立渡る身のうき雲も晴れぬべし

妙の御法の鷲の山風

嗚呼上人の生涯は屈曲を以て充されつゝ、恰も激浪の澎湃たるに似たり、本化大聖行藏の跡固より測量し難きものあるも、但この大飛躍の中何人にも識得せらるべきは一の滅びざる大主義と一の尊き大慈の行願となるべし

(完)

日蓮は法華經の智解は天台傳教には千萬分が一  
分も及ぶことなけれども難を忍び、慈悲すべ  
たることはおそれをも懐きぬべし。(題目抄)

凛烈の間に處して上人の意氣は愈々昂り死身弘法の覺悟は愈々堅く、慈悲衆生の志念は轉々熾なり、上人は靜かに筆を操りて開目鈔を著し給ひぬ曰く、頸切らるゝならば日蓮が不思議留めんと思ふて勤へたりと、佐渡の謗法者は遂に鎌倉に訴へ出づることゝなれり、彼等の僉議に云ふ、かくてあらんには我等は餓死ぬべし何にしてもこの法師を失はばや、既に國の者も大半附きぬ如何かせんと、茲に於に乎念佛者の長者唯阿彌陀佛持齋の長者生驗房、印親が弟子道觀等鎌倉に走り上り武藏の守殿に申す、この御房島に候ものならば堂塔一字も候べからず、僧の一人も候まじ乃至夜晝高き山に登りて日月に向つて大音聲を放つて呪咀し奉る、この聲一國に聞ふと、この讒訴は果して効を奏せしか、事は案に相違せり、文永十一年二月十四日の赦免狀同三月八日に鳥に着きぬ、増上慢の聲口惜きことと思ひて御赦免あるとて生けて還さんやと罵る、されど上人は同月十三日順風吹き來つて須臾の間に越後の津に渡り給へり越後信濃の増上慢の人、上人を窺うたるも畢

## 宗教の權威

石川 顯 隆

世間の多くの人を見るに相當な教育を受け可なりの地位に居る人でも宗教の眞の價值を知つて居る人は甚だ僅かである、或る多くの人は宗教は倫理道徳を補ひ社會の秩序を保つて行く上に多少人生を益するものである隨て宗教の價值は倫理の標準に照して是非道徳の規定に依つて左右すべきものと思つて居る、又或る多くの人は宗教は國家の權力の下に立ち其の國の發展に都合よく國民を指導し開發して行くものと心得て居る、されど宗教に對する斯かる見解はいづれも本末顛倒の甚しきものにして單に宗教を侮蔑して居るのみならず實は自己の價值なきことを天下に表白して居るものである

元來人は現實の世界に生息するものなるが故に地上の種々なる束縛を免るゝ事の出事ないのは云ふまでもないがそれと同時に常に理想の平等界に遊び種々たる無

限の法説に浴する尊い一面を有する事を自覺せなければなるまい

若し人にして此の理想の一面を無みし單に現實の權利とか義務とか利害とか打算とか云ふ物質的慾望のみに汲々として五十年七十年の生涯を送り空しく死に歸するものならば、たとへ世界萬邦の君主となり富貴界を保つと云ふとも畢竟東の間に逝き去るべき貧窮の一衆生たるに過ぎないもので人生は真に空漠たる荒墟である。然るに吾人人類にこの何物よりも偉大なる自覺を教へ、たとへ身は塵寰に居ると雖も常に悠々たる無價の生涯を送らしむるものは真に宗教の賜である、宗教は實に久遠却來無明の世にささよいし吾人に永遠不滅の生命を與へ、煩惱具縛の生を貪ぼりし我等を佛陀大愛の御前に立たせて父子本來の關係を感得せしむるものである、宗教の本領は究竟して此の一點にあるので、嗚呼天下何物か斯かる權威を有する宗教に對して其の光りを争はんとするものがあらふか、實に偉大なる宗教の前には地上の一切の高きものは其の高きを失

思ひ所領をかへりみること勿れ」と仰せられし真意やキリストの「地に泰平を出さん爲に我れ來れりと思ふ勿れ泰平を出さんとはあらず刃を出さん爲に來れり夫れ我が來るは人を其父に背かせ、女を其母に背かせ婢を其姑に背かせんが爲なり人の敵は其の家のものなるべし、我よりも父母を愛ひ者は我に協はざるものなり我よりも子女を愛ひ者は我に協はざるものなり、其十字架を任ふて我に戒はざるものは我に協はざるものなり」と宣言せし是等の語を聞き驚心駭目して宗教は國家の安寧を害し家庭の平和を重んぜず父子の親骨肉の間を割きて相せめがしむるものにして苟くも五倫を標榜して教を立つるもの、斷じて信ずべきものにあらずと云はん、されどかゝる者輩には到底宗教の妙趣を解すること能はざるのみならず實は生々たる人倫道徳の光源をも窺知する資格を有せざるものである

吾等人類は大なる佛陀の恵の内に住みながら、佛陀大悲の愛子たる自覺を先して只皮相國家とか財産とか法律とか名譽とか云ふことのみに着目し其中で倫理道徳

ひ大なるものは其の大を失ひ善なるものは其の善を失ひ美なるものは其の美を失ふべきものである

昔者惡魔がキリストを試みんと欲し彼を拉して最も高き山に登り世界の諸國と其の榮華とを見せて「爾若し俯れ伏して我を拜せば此等を悉く爾に與ふべし」と云ひし時「サタンよ去れ人はパンのみにて生くるものにあらず」と喝破せしキリストの一語は真に宗教の權威を遺憾なく發揮したる痛狀の言である、又我祖日蓮上人が三大秘法抄に「梵天帝釋も來下して踏み玉ふべき戒壇なり」と仰せられ、種々御振舞抄に「わづかな小島の主等が威さんのをぢては閻魔王の責をば如何がすべし佛の御使となりのながら臆せんは無下の人々なり」と仰せられし權威の前には王者もなく法律もなく富豪もなく頑徳もないのである、宗教にこの權威を認めざるものは只淺薄なる物質的欲望のみに盲従して居る碌々たる小人の徒である

又固陋なる道學者流は日蓮上人の「各々我弟子とならん人々もをくしをまはるべからず、親を思ひ妻子を

と云つて見た所でそんな淺薄なものでは人を動かす何の權威もない、宛も清盛が嚴めしき甲冑の上に法衣を着し、獵師が衣を纏ふて動物に接近する様なもの、外面を装ふ一個の道具に過ぎない、道學先生が如何に云ふとも倫理道徳は大なる宗教の活源頭より流出するにあらざれば斷じて空論たるを免れない、日蓮上人が極樂等の良觀を惡惡魔と呼ばれ、キリストがニコデモに對して「人若し新に生れずは神の國に入るに能はず」と云ひし如き無限の權威ある教訓にあらざれば劣機下根の我等は到底恵み深き自覺の生活に入ることは出來ないのであります。

### 那須野の法雨

自行具 笹川 眞應

栃木縣貧弱の寺院に住職せる山口芝沼大根田の三師が護法の道念に驅られ、管長本多大僧正の御親教を懇請せり、本多大僧正は或は講演に或は演説に日も尙足らざるの恨みあるにも拘らず、青年住職が弘法の精神を

嘉納せられ、その親教を許容して十一月十五日午前九時十分上野發列車にて、該地へ出發あらせられたり、不肖隨行の光榮を荷ふて陪從することになり、午後一時寶積寺驛に着するや、大根田芝沼山口の三師同驛にて猥下を迎へ、同所建具屋旅店に小籠し、一行輿車を連ねて高根澤村柏崎の妙顯寺に着し、同寺檀信諸師の迎謁を受け、猥下の宿泊所たる妙福寺檀頭鈴木須左氏の邸宅に入る、鈴木須左氏は温良にして精神家なり深く顯本の正義を信奉す、今回猥下を迎へたるを法悦の喜を以てせり、同夜は當主が赤誠をこめたる款待を受け、猥下は坐談一々教訓を含める御物語ありて青年住職諸師を指導遊ばされたるは、側に侍する不肖はいたく感慨に打たれたりし、

翌十六日快晴、木村義明師は猥下御見舞のために宇都宮より伺候し、直にこの一行に加はれり、午後二時より同所龜梨尋常小學校に於て演説開會、

開會の主旨  
國教と徳本  
國民の自覺と健全なる宗教

芝沼 瑞真  
佐川 眞應  
菅長 猥下

包めるに似たり、而かも内心の光は自から外に現はるゝも奥味しき限りなり、邸宅宏壯殊に新築の室は主人多年の用意にて、用材の秀逸を擇び庭園の數奇珍石を蒐むの苦心、湯殿の結構すべて主人の面影を思はしむ、午後二時演説會場に赴く會場の行届きたる昨日といひ今日といひ、教員諸氏がその職責のために我等宗教家と互に靈氣の通ふの徴候あるを悦ぶ、されど此の通ふ靈氣は「國家中心」に於て國民を指導するにあることを忘るべからず、

開會の時  
正義の活力

木村 義明  
佐川 眞應  
菅長 猥下

本日の猥下の演説も約貳時間、前日に増して聴衆に感動を興へられたり、午後七時より見自家一族のために法話あるべきの所、晝間の演説會より引續き聽問するもの多くあり、猥下は宗教信仰に就て「感應、實在、神秘、懺悔、道義、推理」の六要素あることを明示せられ、これに依て信仰安心を確立するの道を教へられたり、同夜は一行五名の能所同家に宿泊す

猥下は約貳時間懇切に明快に國民の自覺に就て、宗教選擇の良否に就て、慈教を垂れ給ひしに聽者何れも感動興奮せる有様は、靈化の妙之を不肖の拙なき筆に現はすの力なきを不肖は正直に白狀す

同夜更に妙顯寺に於て法話を遊ばすことになり、不肖と木村師の前講を終へ、猥下は純教義面より諄々乎として、安心決定の要目を指教せられ、終りて御休憩中基督教信者に對し、啓蒙的談話ありしが彼はこれを味ふの力ありしや否や、眞に道を求むるの志あれば、單り其人のためにあらず、附近信仰の生面を認むるの動機となり、正義のために悦ぶべき現象を見ることゝなるべし、同夜又も鈴木氏に宿泊す、

十七日快晴、本日は妙顯寺の檀頭にして、縣下屈指の素封家、見目、清氏の所在地同村太田高等尋常小學校に於て開會し、夜間は見自家一門のために猥下の法話あるべき豫定なり、午前九時見自家より迎ひの腕車にて猥下の一行は、太田に向ひ午前十一時見自家に着す當主清氏は春秋壯齡なるも資性謙讓にして寶玉を内に

十八日快晴、本日は片岡驛本經寺に向ふべく朝早く出立することになしぬ、鹽谷郡長某氏は今回の大演習に際し晝夜寢食を忘れて職務に盡瘁し、大演習後突然充血にて逝去せられ、本日は其の葬儀を矢板にて舉行する由、見目氏も葬儀參列の爲に矢板へ赴くとのことなれば、共に同行することになり、一行寶積寺驛に向ふ、木村師は同驛にて宇都宮に還り、猥下を始め不肖と山口芝沼の二師は同車をなして、午前十時片岡驛に着す、片岡の本經寺は同地を去る約壹里乙畑の僻村にありしを、芝沼師が布教の便宜と寺院の發展を考察して今の地に移したるもの、檀家少數なれども附近の信徒何れも熱心に世話なすその真情掬すべきことなり、本日は午後より暴風起り、殊に演説會場は厩裡を使用し、猥下の御休室に充てたる本堂は貳間半四面の小庵にして、柱弱はく且つ片岡は高倉山の嵐、劇しく片岡のからかぜと何にやはら、所謂片岡名物として名高きもの、由、不肖猥下に對し、法のため道のためにあらざれば人は懶しきことに思はん、然るに猥下は平然とし

て平生に替り給はず、暫ばし塚原の昔を偲ばれ候と申上ければ、猥下は笑を以て不肖の言を迎へられたり、午後二時より演説開會

開會の事由  
實とは何んぞや  
法華經の大意

山口安雄  
笹川眞應  
菅長 現下

襲さに違へたる郡長葬儀のために、片岡附近の有志は本日の演説を拜聴する考へにて午後一時までに歸る豫定にて、行きしが葬式は遅れて午後八時頃漸く還りたる由、されど此の障りあるにも拘らず演説は響きあり光あり、力ありて聴衆に感興を與へられたり、午後七時より更に開會

生命を蘇たにする所以

大日本國

事 功

日蓮上人の教

芝 沼 瑞 兵  
山口安雄  
笹川眞應  
菅長 現下

猥下は平易を旨として、宗教の意味を布行せられ之によりて教義安心行法の意義を教示遊ばされ、聴衆何れも渴仰の涙に咽びけり、同日同寺に一泊し、翌十九日午前十時同寺出發午後四時無事歸山遊ばさる、此の行

僅に三日間の法雨なれども、豫て猥下が理想とせらるゝ實社會對宗教の問題を圓滿に試みることに、地方人士が覺醒と、宗教家が道念の力は如何に雄大なるか、これ等の事を認むるの便りを得たるを悦ぶ、朽木縣下は淫祠迷信のはびこる所と開く、或は然らん然れどもこれ固定的にあらず、真正の信仰を求めんとする人士の多々あるを不肖は目撃したり、庶幾くは僧俗共に正法護持の、大道念の下に安住あらんことを、終りに瀝み、見目清鈴木須左氏其他の有志が、芝沼大根田山口の諸師を外護して、この大佛事を成辨せしめたることを飲んで感謝す。

## 東北の傳道

筵 堂

予は盛岡婦人會の招致により十一月二十二日東都を發足して同地に行く、二十四日二十五日廿六日の三日法敷を響かせ、廿七日盛岡を出發して青森に一泊す、青森灣頭の清波は予の心を澄まし、遠く臥牛の方向を

眺めては、日持上人が六百年の昔艱苦を忍んで雄圖を異域にもたらして、正法の光顯に力を竭したるを思ひ忪べ、今宵は予の胸底何んとなう靈氣の通ふ心地せられて、予は瞬時の至誠家信仰家になりぬ、

二十八日青森發一番列車にて大釋迦に搭乗し、此處より馬車を驅りて木造町に向ふ、大釋迦より壹里半の山路を經れば所謂岩木平野に出づ、眼界際限なう廣大な水田を視て予は東北に斯かる平野あるに一驚を喫す、午前十一時五所川原町に達す、東北會館の主任工藤天山君此に予を待ち受けられ、同行更に馬車にて木造町に正午頃達す、會館信徒一同の挨拶をうけ、同夜會館に於て對信徒の法話を約貳時間なし、午後十二時寝に就く、廿九日午後七時より同地木造座に於て公開演説をなすべく、信徒の諸氏は準備に忙殺せられ、工藤天山君は道路演説をなして町民に警鐘を與へらる、午後七時會場に到る、聴衆六百有餘、工藤天山君開會の辭に因みて統一主義の理義を述べ、予は「釋尊の實在と活動」の題下に約三時間、二席に分ちて論明せり、演

説に先きだち、予は念願すらく顯本の正義を津輕領に於て傳令するは、予の光榮とする所、拙なき予の辯論をして成果あらしめよと、然るに予の演説は無礙に了はり、聴者に感動を與へたるとして、一同の満足を得たるは予の無限の悦びとする所なり、三十日會館に於て予は「活ける信仰の意義」と題して、講演的にこれ又二時間以上述べ、最後に訣別の教訓として法華經を得るの道を辯じ、更に奮闘耐忍すべき旨を懇示す、

予は筆の序に統一會館の状態を讀者諸君に紹介せん、主任工藤天山君は好箇の青年なり、温良にして謙讓の徳を備へ、一見女性的容姿なるも、主義のために熱烈に奮闘す、附近人の群集する場所あれば必らず出陣して孤身敵壘に迫る勇士の面影あり、而して天山君は宗教家にあらず俗人なり、而かも虚榮を顧みず一人この會館に居住して、少數信徒の捧ぐる軍糧によりて清淡なる法悦的生活を學ばずして味ふ、これを吾人宗教家を以て標榜せる無道念の僧侶が、空しく檀施に飽食し安眠を貪ぼる、尙雪山の寒苦鳥と簡ぶなき畜養法師

に比すれば豈に慚愧すべき至りならずや、顧みて信徒を窺ふに各異體同心の祖訓を堅守し、四面楚歌迫害あるも意に介せず、統一主義のために犠牲を甘んずるの風あり、本多大僧正の「聖語録」を師友として信行偉意なき有様は、確かに桃源の美風といふも過褒にあらざるなり、予が會館滞在中信徒の一人川島勇太郎君はその祖母が七十五歳の高齡にして、加ふるに老羸歩行に艱む、故に予の法話を聽聞する能はざるを恨事とせる祖母の心情を察して、祖母のために安心の法話を望む、依て予は川島氏の宅に行き、祖母のために「壽量品」と持法華問答抄により、法話をなす、外誘迫害の間に處する信徒の信仰状態は、實に強健熱烈なるものたるは訝ふべからざる實證を得たり、

予が東北傳道中は概して天氣温晴恰かも小春日和の如く、予は心に北國名物の雪を見ざるを恨みに思ひしに三十日は強風劇しく、降雪皚々土地の人はこれが根雪になるかと謂へり、而して明日は予の盛岡指して還るの豫定なり、信徒婦人部の老母二人を予の早天に立

するに遺漏なからしめんとて、法のために寒氣を凌ぎて通夜をなし呉れたり、

十二月一日、降雪積ることん殆ど壹尺、午前九時木造町を發し同十一時五所川原に達す、此處より一行六人櫛に乗り大釋迦に出てんとす、旅は道連れ世は情、末聞不見のに對し、同行の人士が滿腔の同情をかけられ、立場に憩ふ間も何くれとなく款待せられ、廣漠たる岩木平野を過ぎて彌々大釋迦附近の阪路に向ふ、連山相疊なり繞るに水澤を以てし、山々木々添ふに雪あり、しかも予等の一行は高さ所より徐々と低に下る、嗚呼自然の風景、自然の美は此にあり、予はこの自然の神韻に打たれたり、自然の眞意義は實に此に存す、同夜は亦も青森に一泊し翌二日一番列車にて盛岡に還る、

十二月二日午前十二時盛岡着、法華寺々主渡邊法兄は予めために、特に迎の車を停車場に遣はされ、寺に到れば信徒交々予の遠征を撈ひ、共に々に、法運の發展を祝福す、同夜同地婦人會のために法話をなす、盛岡

の地は宗教に厚き所なり、而して盛岡人士は穩健にし親切なり、予が同地滞在中宗教談を求むる人の昨年より増加したる傾向あり、且つ住職渡邊師は護法家にて精神家なり、信徒の増殖と寺門の經營は日を追ふて進めり、

十一月三日午後十二時盛岡を發して二本松に向はんとす、來秋までの訣れなれば今宵も法話をなさんと謂ひしに、既に一回家庭法話をなしたるにも拘らず、村田佐吉氏の懇志により同家に於て更に法話をなし、豫定の通り三日午後十二時、深信の人の見送りを受け二本松に行く、

十二月四日午前八時、二本松り着し直に蓮華寺に到る寺主米羅惠長師は、予が舊交の親友なり予の來松を鶴首相待ち、既に本久寺々主笹本春義師と計り、檀信諸氏の熱心なる賛同を得て、演說會を公開すべく下準備あり、而して予は東歸を急ぐの事情あり、依て同夜蓮華寺に於て開催することになり、蓮華寺檀頭田村先生初め準備に盡瘁せられ、米羅管木の兩師は東奔西走報

知の勞を採られ、午後七時より開會、米羅惠長師所感

を述へられ、續て予は約貳時間佛性論に就て講述し、午後十時二本松發の列車にて翌五日午前七時品川に還る、二本松に於ては東北聯合布教線を張ることに賛成を得たり、予がこの行に就て感したるは、邊陲の地に任職せる諸師は、何れも護法扶宗の精神に富めり、若し簡易にして効果ある傳道をなせば、皆悦んでこれを迎へ共に教義發展のために、佛子の本領を實行し本領を發揮すべし、これを高等の寺院に住職し、布教などには毫も念慮を費さず、空しく信施に生きて耻辱を重ね罪科を増し、品性の劣等を紫衣や公器の裏に匿す者に比較せば、貧寺に住職して孤城を守る者には須からく同情して、援護することを努められたし、今や發展せる宗團は皆活動せり、而して我等同志が天下に先驅して、唱號したる統一主義は已に々々、天下に彌漫せり、大に奮勵して倍々發展せんことを、予は道のために梵行を身讀したることを悦ぶなり

岡山通信 池上化城報

○上田日久居士葬儀 當地篤信者上田日久居士去月二十六日逝去す十月二十日本多管長、野口宗務總監の貴臨參列を仰ぎ本葬の式を營む内山下弘通所午後二時出棺能仁副導師以下皆徒歩し婦人會員、篤信會員 其他皆草履にて會葬し靜肅に本行寺に着し本多管長の導師にて莊嚴なる法要あり篤信會總代大熊虎太郎氏の弔辭山名上人の弔電弔文代讀野口宗務總監原田上人の歎徳能仁上人の告別の辭、遺族の焼香各地信徒總代の焼香葬儀委員總代須山茂三郎氏の謝辭にて午後四時に終を告ぐ會葬の上人方は前配本多管長野口宗務總監和氣原田上人津山山名上人なりし

因に上田日久居士は故兒玉日容師本多管長等に歷仕し専ら正義の發揚に努力し終世淪らざりし強信者なりし今や近く悼むべし享年七十有九

法號 顯壽院義行日久居士

○日蓮研究會臨時講演會 去る十月二十日午後七時半より市内山崎町本行寺に於て日蓮研究會臨時講演會を

開く

開會之辭

宗教は歌ふものなり

日蓮上人の信仰

の講演あり聽衆四百餘名非常の盛會なりし

○佛教演說會 當地篤信會主催の佛教演說會十月二十一日午後七時より本行寺に於て開會

開會之辭

血あり肉ある宗教

天晴地朗

能仁 僧正

野口 僧正

菅長本多管長正

聽衆六百餘名流石に廣き本行寺の庫裡も立錫の餘地なく庭門等に溢れて聽聞せり各辨士の熱烈なる演説は多大の法雨を降したり

○送信庇護の佛教演說會 御津郡大野村大字野田は能仁上人の布教法益に潤ひ正義の呼聲高く改宗者續出せるにより一致派の妙林寺に於ては豫防策として備前日宗傳道會とかに招聘したる天鼓の主筆柴田顯秀師を雇入れ同村に於て十月二十三日午後二時より佛教演說會を開催せり、柴田師演說の要旨は遺文の研究智的思索を否認し唯仰ひて信すべく理論を談るものは信仰なしと安斷し別勸請は下根下機には誘引の方便として可な

佛教演說會を開催す

開會之辭

惡智識を遠離せよ

最善心の調整

由井ヶ濱

本尊と信仰

力 用

井上 次郎八

須山 茂三郎

池上 化城

森安 敬信

中川 孝顯

能仁 等一

何れも熱烈なる論辨を以て柴田師の理論排斥、研究否認の不可なるを駁し本尊の雜亂勸請を別にするの非なるを破折し經文祖書により論難し完膚ながらしめたり特に森安氏の如きは彼謗法の奴輩は由井ヶ濱に於て信仰上精神上斬罪に處すべきものなりと論斷せり聽衆二百餘名盛會なりし

○日蓮研究會 去る十一月六日午後七時より山崎町本行寺に於て開會聖語錄佛陀篇應現章は講師能仁事一師によりて講義せられ終に討論會あり聽衆百餘名

○日蓮鑽仰會發會式 去る十一月七日午前九時より山崎町本行寺に於て岡山に於ける中等學校以上の學生を以て組織したる日蓮鑽仰會發會式を舉行す是より先に別紙趣意書は第六高等學校學生中川克、小西俊平、小西憲三、市村某、及岡山醫學專門學校學生上田義信の

り上根上機は直ちに本門十界の本尊を信仰すべして變妙滑稽なる本尊論を主張し迷信を庇護し別勸請を鼓吹する如き迷説を吐き終に身延山無間論を唱導するものあるも大聖人身延御書にある如く延山は神聖なるものなり之を無間と謗する奴輩は墮獄一定なるべしと論し降壇す本宗信者須山茂三郎氏聽衆の中より質問と叫び起つ是より先改革派磯島品三森安健次兩氏刺を通して質問を申込む三氏質問中須山氏か末法に上機上根の人ありとは何れの本經何れの遺文にありや末法は機劣れるか故に經力の勝れたる法華經によりて救濟せらるゝにあらざるや輪圓具足の大曼荼羅あるにも拘らず何に不足を感じて別勸請を必要とするやと短刀直入に詰問しかるに柴田師語塞る時に同地一致派の信者暴力を以て須山氏を場外に引出し紛擾喧騒を極めたることは當時當地の中國山陽兩新聞の記載する所如し然るに須山氏の何等抵抗を試みざりしが爲め事なまさを得たりし引續き同地改革派と現狀維持派との間に論争あり警官出張取鎮めたる由

○請教演說會 去る十月二十三日の柴田顯秀師の研究排斥別勸庇護を辯駁する爲め御津郡大野村大字野田近田壽吉氏宅に於て能仁事一師外數名の辨士により反駁

諸氏により各中學校師範商業工業等の中等學校に配付せられたり當日は日曜日と相當し各學校等に運動會の催しあり來會者比較的少數なりしも午前九時開會中川荒氏の宣言書朗讀並に東京天晴會、津山天晴會、京都醫科大學生多田昇太郎氏より祝電を朗讀し各辨士左の演題の下に長廣舌を振はれたり

予の聖日鑑に私淑するに到りたる徳師  
現代の思想界を論じて日蓮上人に及ぶ  
大和民族の特性を發揮したる日蓮上人  
誤解せられたる日蓮上人  
聖日鑑を生める法華經

○千葉縣大法會概況

縣下聯合第四回大法會は、千葉縣長生郡本納町蓮福寺に於て、去る十一月廿七、廿八、廿九日の三日間、盛大な式を舉行せられた、拾月初旬より當番教區たる第四教區に於ては、副總務森川會殿、前田日應、管事兼會計神田日兆、準備員成島、山本、倉上、小川、酒井、徳、齊藤、寺田等の諸員は日夜寢食を忘れて此事に盡力せられたり

學林教師及生徒等、逐次參集し午前拾時を報するや、副總務已下準備員、町長、蓮福寺祖家總代人、郵便局長、支學林教師生徒、地方檀信徒の團隊は紅白の玄題旗を翻して、本納停車場に向はれた、而して一發の煙火空中に轟くや、管長親下は宗務總監野口僧正、總務齊藤僧正を隨へ蓮福寺に到着あらせられた、午後一時第一第二の號鐘にて蓮福寺の大廣間より客殿を經、消防夫の警蹕につれ、俗人、稚兒、中座、親下、各教區僧員、等參拾余間の新築長廊を練行き昇室せられた、此際に於ける光景は幾千の參拜者をして、無限の美感と隨善の涙にむせばしめた、而して着室の上規定の差宗に基きいと森嚴なる法要を修せられた、法要後直ちに紀念撮影を爲し

信仰の力

管長親下

の演題にて懇篤なる御親教をなし、宗務上缺くべからざる要件ありて、即日御歸京なされた、實に一同の遺憾此上なかつた、次に管長親下の誼語文と本納町長の祝詞を記さう

維時明治四十二年十一月廿八日縣下聯合大法會を奉行せらる、不肖岩雄、是の盛典の末席を汚し、歡喜の至情に堪へざるものあり、即ち一言を列して敢て

▲第一 壹 日

廿七日は即ち初日、朝來より潮の如く寄せ來る四方の檀信徒、並に各教區僧員等、町内及びさしもに廣き境内も餘地なき程、而して午後四時井口僧都の導師にて各教區僧員出席、一座の法味を捧げ大法會開催の報告式を了つた、夫れより徹宵演說辨士は

- 開會の時
  - 自 演
  - 民族的宗教
  - 宗教と道徳
  - 解行の二門
  - 論法展論
  - 久遠の教主
  - 菩提の安心
  - 戊申圖書の聖意(1)
  - 教 化
  - 統一の宗教
  - 町村發達の原因
- 成島泰行
  - 宮川光繼
  - 三上義敬
  - 小澤盛重
  - 小高日場
  - 秋葉日成
  - 小竹俊雄
  - 土屋員容
  - 三上義敬
  - 中村乾信
  - 井口善敬
  - 成島泰行

▲第二 日

明れば二十八日中日なるを以て、兼て招待狀を發し置きたる總本山信徒總代、郡長、町村長、學校職員、支

慶讃の誠を表せんとす、思ふに報本反始は國家道徳の本源也忠君孝節の大倫も歴史的觀念の精練せられたる報本的思想の結晶也而して此純粹的道徳に文明と活力を與ふるものは實に我々日蓮大聖人之絶叫せられたる宗教の眞髓ならざるべからず、今や一等國の伍並に列せる吾國戦后經營には實に上述の如き大徳を確立して社會の圓滿なる發達と國力の充實を希圖するを早天の雲霓も管ならざる也、茲に奉修る法要の意趣も亦報本の大義に鑑み七里の靈域を經營せる有縁の靈位と國家の公義に殉せる報國盡忠の英魂を追吊し進んで完全なる宗教を興隆して社會の改善を促すの聖業也、慈善公共の根底事業也其に緊要切實の問題にあらずや聊か日常の所懐を述べて祝詞に代ふ

明治四十二年十一月二十八日

誼語文

本納町長 石渡 岩 雄

奉勸請本川常住之三寶來臨影向知見照覽伏して巨るに國民生活の根底を確立し健全なる社會を建設せんには必ず國民箇々の精神界に向つて最も公正なる統一を與へ尤も激刺たる活動を促さずんば

あらず、而して此統一の意識を與ふるに於て宗教感  
 化の必要なるは論無き所、只其の激濁たる活動に至  
 りては多くの宗教感化に於て欠失せるを見る、是れ  
 蓋し宗教は永久不變の道を感化の根底と爲すより來  
 る結果にして勢ひ止むべからざるものありて存ず然  
 れども此欠點を除き得て統一と活動とを調和せる感  
 化を與る宗教あらば現代の如き生存競争の激甚なる  
 社會に處して健全なる人格を造り以て國家の存立と  
 發展とを全するには國民は擧て此種の宗教を歡迎  
 せずんばならず宗教自由は我が國憲の保證する所な  
 りとは云へ宗教當面の本分が健全なる國家の建設に  
 あるの明白となる今日決して迷信に流れ亦は但未  
 來觀に囚はれ若しくは意識の統一を誤り頑迷の信仰  
 を以て甘んずべきにあらず宜しく正々堂々たる國家  
 的感念に住し統一と活動とを併せ與ふる大宗教を求  
 むべし蓋て按するに我祖 日蓮大聖人の立正安國の  
 主張は眞箇此要求を滿すべき尤も健全なる宗教なり  
 とす茲に本縣下に於ける門下各寺院聯合協力して大  
 法要嚴修し以て立正安國の實現に資し併せて國民箇  
 々の眞正なる信仰を喚起せしめ此功德を以て法界に  
 回向す、冀くは三寶聖衆哀愍救護し諸願成就ならし

め玉へ、南無妙法蓮華經  
 明治四十二年十一月廿八日

顯本法華宗管長大僧正本多日生

此日道路布教には大津賢淳師の指揮の下に支學林生徒  
 一團次に秋葉日度、三上義徹、小高日唱、小竹俊雄、  
 等諸氏の道路布教は有志別働隊として、互に非常なエ  
 活動を爲した、尙當日晝夜の演説及辨士は

- 信仰の道
  - 業法と救済
  - 世智辨愚
  - 日蓮上人の人格
  - 檀那論
  - 信仰の眞諦
  - 安心の要諦
  - 檀口の法語
  - 成申圖書の聖意
  - 道徳の根底
  - 功德の母
  - 人生の悔悟
  - 近世文明と吾人の自覺
  - 人とは何や
- 大川日敬
  - 横山會享
  - 渡邊乾秋
  - 三上義徹
  - 秋葉日度
  - 森川會殿
  - 夏目智賢
  - 伊新實樹
  - 三上義徹
  - 京藤義忠
  - 小竹俊雄
  - 川島寛俊
  - 長 宏中
  - 宮川光熙

現代の宗教  
 社會救済の要諦

秋葉日度  
 成島善行

▲第 参 日

廿九日は満願結了の日にて同日は大僧正中田日蓮上人  
 の唱導にて、前日の如く俗人、稚兒、中座、各教僧  
 員等にて芽出度無事午後五時閉會を告げた、尙當日先  
 住大塚日靨上人の七回忌を修し、法縁檀信徒の参列者  
 も澤山あつた、殊に此法會中村上貞藏翁か老軀をもの  
 うしとせず盡力せられたるは感服の外ない、尙参列者  
 諸氏の芳名を記して其厚志を表すべきであるが、餘り  
 長くなる故御免を蒙る (般舟生)

○顯本協會 同會は山根關田石川の三師出演十一月十  
 二日は品川妙國寺に於て本多大僧正笹川石川諸師の演  
 説あり 十四日は淺草常林寺に於て關田石川吉田諸師  
 の演説あり、二十七日は品川妙蓮寺に於て山根中原兩  
 師の演説あり、諸師が熱誠と道念は必らずや僧侶をし  
 て自覺せしめ奮起せしめ、信徒をして正定聚に入らし  
 むる事記者の確認する所なり

○東金町西福寺の落慶式 同寺山主山岡會俊師は昨年  
 來檀信の賛同を得て、大本堂屋根替の大事事に着手せ  
 られたるが、今回竣成を告げたるを以て、十一月廿一

日管長本多大僧正を招請し、盛大なる落慶式を舉行せ  
 られたり

○御遺文講義第參卷出づ 宗學に造詣深き清水梁山  
 先生の御遺文講義第三卷は、名古屋市高岳町二丁目の  
 唯一佛敎團より發行せられたり、本書收むる所、佐後  
 篇第參通「五人士臨御書」佐後篇第四通「同一鹹味御書」  
 にして何れも讀切りのもの、平易を旨として簡明に、宗  
 學研究のためには好箇の伴侶なり、正價金三十錢、購  
 讀加入希望の人は至急同所へ申込まるべし

○宮谷同志會 同會は本年二月の創立にして會員六十  
 餘名若少壯有爲の宗教家にして會員相互氣脈を通じ興  
 學に布教に社會改善事業に擁護を與へ専ら宗風の發揚  
 に努力しつゝありしが去る十一月二十八日上總本納町  
 蓮福寺に開催せる千葉縣聯合大法會には會員十數名來  
 會せるを以て同夜同志演説會を開會し十數名の青年辯  
 士各得意の廣長舌を振ひ三百有餘の聽衆をして襟を正  
 ふして傾聴せしめたるは其感化の効力甚大なりしを知  
 るに足る尙同會員は爾來一段勇猛の氣を起して縣下の  
 教界に活躍せらるゝと云ふ



# 顯本法華宗要品

▲從來頒與し來りし上製並製共品切れに付御要求に  
 應し難く候  
 ▲新製擬白仙花綴子表紙の分、一冊郵税共金拾七錢  
 (一切割引なし)前金の事  
 此分は何百部にても着金次第直ちに發送可仕候  
 東京淺草新谷町一四

## 慶印寺

### 製本出來

文學博士 姉崎正治君序文  
 大僧正 本多日生師 著

## 聖語錄

特製金壹圓三拾錢  
 上製金八拾五錢  
 郵税八錢  
 奉清韓三十錢

本畫の價值、今更贅言を要せず夙に世の鑑識家の認む  
 る所出版以來已に二版賣切れの盛況を呈し、方渴望家  
 の需に應ずる能はず候所今回第參版製本出來致候

東京府荏原郡品川町

統一團

發行所

東京市京橋區品川町十七番地

須原屋書店

振替貯金口座東京四九六〇番

## 謹告

購讀料此際至急御拂込相成度願上候  
 購讀料は爲替にて御拂込が最も便利  
 に御座候振替拂込の節は誌代の外に  
 口座手數料金貳錢御加へ拂込相成度  
 候  
 本誌愛讀諸君にして多年購讀料拂込  
 無之向き往々有之甚た迷惑致居候に  
 付此際至急拂込相成度願上候

### 統一團會計部

## 誌則

- 一 發行情日 毎月一回十五日
- 一 誌料 一冊金六錢、十二冊前金六十五錢  
 郵券代用は一割増、但五厘切手を可とす
- 一 廣告料 一頁拾圓、半頁六圓、四分ノ一頁三圓  
 五十錢、特別廣告十五圓ヨリ二十五  
 圓マデ
- 一 購讀申込 住所氏名を楷書にて認められたし  
 振替貯金を便とす、拂込用紙は最寄  
 郵便局より受取られたし、但し此の  
 場合は誌料の外に金貳錢を振替口座  
 手數料として餘分に拂込ありたし
- 一 代金拂込

明治四十二年十一月十五日印刷發行

發行人 井村日威  
 編輯人 山根日東  
 印刷所 北澤石版所

東京府荏原郡品川町大字南品川四番地十二番地

## 發行所

### 統一團

(振替貯金番號東京二二一九)

### 宮殿・須味段・前 机・幢幡大販賣

### 佛具一切卸

### 諸宗佛畫

### 像畫專門

### 各宗寺院御入用品



### 三法堂佛具發賣目錄

小包佛具類 三法堂佛具發賣目錄 正價目  
 佛具と稱ふれども其種類數多有之候を以て一々記載する能はず以  
 て特に佛具一切正價目發賣目錄を制作致候に付御入用の方諸君  
 は此發賣目錄を御入用下候は、迅速運呈仕候此目録を御用なされ  
 寺院佛具の御入用品一切の發賣物何種遠方でも、應ながら買取安料  
 物座なから自由自在

### 佛具部卸

京都市三條 本舖 三法堂藤田總治  
 通小橋西入  
 特電話二千七百八、三番  
 振替貯金大阪四二五九  
 金番號東京二〇七一九

### 小賣部

同市三條 通大橋西入

三法堂佛具陳列場

## 豫 告

統一主義を天下に先驅唱號したる本誌は、彌々向上發展すべく、本多大僧正の講演其他批評研究の方面何れも錦上花を添ふるの美觀は期して新年初刊の紙上に活躍せん、我徒同人誓て斯の主義のために奮闘して正法光顯の佛事をなして、佛恩報答と濟世利民の淨行を完せんとす、讀者これを諒せられんことを謹白